

秀賞

伝統芸能を極める

青森県黒石市立中郷中学校

1年 北山 美芽莉

心の中に気付けば流れる三味線の音。

私は5歳から津軽手踊りを始めた。津軽手踊りは見たこともなくて知らなかったけれど、祖母に勧められて見学に行った時に見たお姉さんたちと師匠の踊りにすっかり魅了され「絶対やりたい!」と、母に頼み込んだらしい。

手踊りの基本となる動きが丸ごと全部詰まった津軽じょんから節。この曲が一人で踊れるようになった頃には私はすっかり手踊りに夢中で、最初は全部が呪文のようにしか聴こえなかった津軽民謡も「津軽じょんから節」「津軽小原節」「津軽よされ節」「津軽あいや節」「津軽三下がり」の「津軽五大節」といわれる曲がきちんと聴き分けられるようになった。

「太鼓のリズムを覚えると、もっともっと踊りがうまくなるよ。」と、師匠が魅力的なことを言うので民謡も始めた。そうしたら太鼓どころか唄も唄いたくなくなってしまい、手踊りだけではなく民謡にも夢中になってしまった。太鼓を鳴らし、唄を唄い、舞い踊る。津軽民謡と津軽手踊りは私の生活の一部となった。

今年、私は3月に「青森県民謡王座決定戦子ども部」優勝。8月に「民謡民舞少年少女全国大会民舞個人の部」優勝。二つの大会で歌、踊り、それぞれ優勝することができた。でも民謡と手踊りをやっている人ならきっと最終目標は「民謡王座」と「手踊り名人位」。もちろん私の目標もそこにある。子ども部の優勝は目標ではなく、最終目標を目指すためのスタートである。

第二代青森手踊り名人位である師匠から私は民謡と踊りを教えていただいている。また、今年第51代青森県手踊り名人位となったお姉さんは、私が手踊りを始めるきっかけをつくってくれた人だ。憧れの二人に少しでも近づけるようにと思うと、自然と稽古に力が入る。

踊りも唄もやればやるほど奥が深い。一つの技を覚えると、次の一手をさらに深めたくなくて終わりが無い。かかとを上げて爪先で踊るので今まで何足の足袋を破いてきたのかわからない。最初は1曲太鼓を叩くだけで手のひらにマメができていたのだが、今ではそんなこともなく、しっかりと叩ける。以前は入れなかった節を一節、二節と、唄に取り入れることができるようになってきた。それでもまだまだ道は遠い。

津軽民謡と津軽手踊りは間違いなく私の心をつかんで離さないが、あまり友達とは話題にすることは無い。なぜなら、誰も民謡や手踊りを知らないからだ。

きっと年々世の中での認知度は低くなっていると思う。実際に両親も私が手踊りを始めるまで知らなかったのだ。地元黒石市の日本三大流し踊り「黒石よされ」が、民謡と手踊りであるということも知らなかったそう。実にもったいない。

私は唄と踊りを極めて、この素晴らしい伝統をこれから先に残したい。だから担任の先生から「9月の文化祭で津軽手踊りをステージで披露しないか。」と誘われた時も、全校生徒の前で踊るのは普段の何倍も緊張しそうだが、意を決して踊ることにした。私の踊りで青森県にはこんなに素晴らしい伝統芸能があるということを一人でも多くの人に伝えることを願っている。

手踊りを始めてから、あっという間に8年となった。今13歳だから、人生の半分以上続けていることになる。手踊りと民謡を始めたことで視野が広がった。地元だけでなく、県内各所、岩手、秋田、宮城、そして東京ドームや浅草公会堂での舞台や大会もあった。その間、たくさんの出会いがあって、尊敬できる先輩方、大切な仲間や心から信頼できる友達、一緒に成長できる一番の友達ができた。

この先、何十年と続く人生、3年前から想像もしていなかった新型コロナウイルス感染症が流行したことで、中止になった舞台や大会がたくさんあり、悔しい思いもたくさんした。でも、この先どんな未来が待っているのか誰もわからない。一つだけ言えるとしたら私は唄っている。そして踊っているということだ。それだけは断言できる。

津軽民謡、津軽手踊りを極める日を夢見て。